

規制値とした。この暫定規制値は、緊急を要するために食品健康影響評価を受けずに定めたものであることから、厚生労働大臣は平成23年3月20日に食品安全委員会に対し、食品安全基本法第24条第3項に基づいて食品健康影響評価を要請し、食品安全委員会は、平成23年10月27日に「評価書 食品中に含まれる放射性物質」を通知した。

薬事・食品衛生審議会においては、平成23年10月31日の食品衛生分科会において「主な論点と対応の方向」を整理し、放射性物質対策部会において食品衛生法に基づく基準値の設定に向けた検討が進められていたが、平成23年12月22日の同部会において、飲料水を含む食品中の放射性物質の基準値案が示され、当該案に対するパブリックコメントの募集等の手続きを経て、平成24年4月1日に施行することとされたところである。

3. 水道水の新たな目標の設定対象核種

(1) 食品規格基準の規制対象核種

食品衛生法に基づく規格基準の新しい基準値は、東電福島第一原発事故直後に設けられた暫定規制値に代わり、平成24年4月以降の長期的な状況に対応するものである。このため、基準値の設定において規制の対象とする放射性核種は、比較的半減期が長く、長期的な影響を考慮する必要がある放射性核種としており、具体的には、セシウム134及び137、ストロンチウム90、ルテニウム106並びにプルトニウム238、239、240及び241を規格基準における管理の対象としている。

この際、放射性セシウム以外の核種は、測定に時間がかかることから、放射性セシウムとの比率を算出し、合計して年間1mSvを超えないように放射性セシウムの基準値を設定することとしている。

また、暫定規制値を設定している放射性ヨウ素（代表核種ヨウ素131）については半減期が短く、平成23年7月15日以降に食品からの検出報告がないこと、ウランについては放出量が極めて少ないと考えられ、現時点においては別途規制値を設定する必要性は乏しいと考えられることからいずれも規制の対象とはしないこととしている。

(2) 水道水の目標の設定対象核種

平成24年4月以降の長期的な状況に対応する水道水中の放射性物質に係る目標の設定対象核種については、食品規格基準の飲料水の基準値と同様に検査の実効性を確保することが重要であり、測定機関及び測定機器の数並びに測定に要する時間等の観点から、放射性セシウム（セシウム134及び137）を対象として目標を設定する。

4. 水道水中の放射性物質に係る新たな目標の設定

(1) 飲料水に係る基準値

飲料水については、飲料水が全ての人が摂取し代替がきかないものであり、その摂取量が大きいこと、WHOが飲料水水質ガイドラインにおいて飲料水中の放射性核種のガイダンスレベルを示していること、水道水中の放射性物質は厳格な管理が可能であることから、他の食品とは独立の区分とされた。そのうえで、飲料水の基準値は、年間約0.1mSvとなる飲料水中の放射性セシウム（セシウム134及び137）のWHO飲料水水質ガイドラインのガイダンスレベルより10Bq/kgとされた。

(2) 飲用以外の利用に伴う被ばく線量

水道水については、飲用以外に、①入浴、手洗い等による線量及び②水道水からの揮発を考慮した線量の2つのばく露経路が被ばく線量に影響すると考えられる。

入浴による線量は、原子力安全委員会の助言を受けて環境省が平成23年6月にとりまとめた水浴場の放射性物質に関する指針において用いられた仮定と同様に、放射性セシウムを全てセシウム134とし、その放射能濃度が10Bq/kgの浴槽に毎日30分全身を浸したとして、水中に一樣に分布するセシウム134による実効線量を換算係数 $2.62 \times 10^{-10} \text{Sv}/(\text{Bq} \cdot \text{s}/\text{cm}^3)$ (EPA-402-R-93-081, Federal Guidance Report No.12 p.82骨表面の換算係数 (ICRP Publication 60に準拠)) を用いて計算すると、年間で0.0017mSvとなった。

手洗いによる線量は、水と接触する部位が全身と比較して小さく、また、時間も短いことから、入浴による線量と比較して小さいものと考えられる。

また、放射性セシウムについては、水道水からの揮発等その他の経路については、想定しにくい。

以上の推定は、基準値と同レベルの放射能の水道水を1年間継続して利用した場合を仮定しているが、この場合であっても、飲用以外の水道水の利用による推定被ばく線量は、WHO飲料水水質ガイドラインのガイダンスレベルを算出する基となった年間0.1mSvに比べて十分小さいものと考えられる。

(3) その他の放射性核種による影響

飲料水の放射性セシウムの基準値は、その他の放射性核種による影響を考慮したものである。

飲料水における放射性物質の濃度の評価は、水源とする淡水（河川水及び湖沼水等）中の放射性核種の初期濃度比を使用しており、ストロンチウム90以外の核種は土壌中濃度比を固相－液相間分配係数で割って初期淡水中濃度比を求めている。ストロンチウム90については、文部科学省が行ったモニタリング結果から得られた河川水中のセシウム137に対するストロンチウム90の比から安全側の数値を求めている。

こうして求められた初期淡水中濃度比で最も大きなものはストロンチウム90の0.02であり、セシウム137の2%である。ストロンチウム90のWHO飲料水水質ガイドラインのガイダンスレベルは放射性セシウムと同じ10 Bq/Lであり、また、文部科学省による東電福島第一原発の周辺地域の河川における調査によれば、ストロンチウム90の最大濃度は0.018Bq/kgと低い状況にある。

(4) 水道水中の新たな目標値

以上のように、飲用以外の利用に伴う被ばく線量は極めて小さく、また、放射性セシウム以外の核種による影響も極めて小さいことから、飲料水の基準値である放射性セシウム（セシウム134及び137の合計）10Bq/kgを水道水中の新たな目標値とする。

放射性セシウムは、そのほとんどが濁質成分として水道原水中に流入しているものであり、濁質中の放射性セシウムについては、水道施設における凝集沈殿及び砂ろ過等の浄水処理工程で濁質とともに除去することが可能なものであることから、当該目標値は、水道施設の濁度管理の目標値（管理目標値）として位置付けることが適当である。

また、WHOでは、飲料水水質ガイドラインにおいて、単一試料がガイダンスレベルを超過する場合、当該試料と同じ濃度の被ばくが1年間続いた場合に限って、1年間の飲

料水摂取による預託実効線量の個別線量基準0.1mSvを超過すると見なされるのであり、当該試料はそれ自体が飲用不適であることを意味するわけではないとしている。したがって、水質検査結果を評価する際には、単一の検査結果ではなく数回以上の検査結果により評価する必要がある。

5. 水道水及び水道原水中の放射性物質の検出状況

厚生労働省は、東電福島第一原発事故に対応して、平成23年4月4日に「今後の水道水中の放射性物質のモニタリング方針について」を示しており、福島県及びその近隣の地域の水道事業者等による重点的なモニタリングが実施されてきた。

水道水の水源となる河川水、湖沼水等の表流水及び地下水中の放射性物質の挙動については、東電福島第一原発事故直後は、大気から沈着した放射性核種が表流水等に直接混入して高濃度で検出されたものと考えられる。その後は、陸域の土壌及び水域の底質等に吸着した放射性核種が粒子又はイオンの形態で再度環境水中に流出又は溶脱して、水道原水の取水地点に流達することが想定される。

これまで、福島県及びその近隣の10都県（宮城県、山形県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県及び新潟県）の水道事業者等によって、梅雨及び台風等の豪雨による出水時も含めて1週間に1回以上のモニタリングが継続的に行われてきたが、水道水（浄水）及び水道原水中の放射性セシウムを検査結果では、浄水については6月以降、水道原水については5月以降、10Bq/kgを超える放射能は検出されていない。

また、環境省、原子力災害現地対策本部等により、放射性セシウムが多量に沈着している警戒区域内を含めて、公共用水域及び飲用井戸の水質等が測定されているが、一部の水域を除いて10Bq/kgを超える放射能は検出されていない。

6. 水道水のモニタリング及び検査法

水道水の管理目標値に関しては、今後、以下によりモニタリングすることが適当である。

(1) モニタリングの方法

ア. モニタリング結果の集積

福島県及びその近隣の地域（宮城県、山形県、茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県及び新潟県）の水道事業者及び水道用水供給事業者（本州から地理的に離れ、水道水源が独立している島嶼部の水道事業者等を除く。）については、自ら及び近隣の水道事業者等が実施している水質検査のほか、政府の原子力災害現地対策本部、文部科学省及び地方公共団体等が実施している水質検査について、水道水及び水道原水中の放射性セシウムの放射能のデータを収集し、十分な検出感度でのモニタリング結果を集積する。継続的なモニタリングが必要と判断する水道事業者等は、モニタリング結果の集積結果に基づいて、平成24年度以降の水質検査計画に放射能の水質検査を位置付けるものとする。

イ. 対象項目

放射性セシウム（セシウム134及び137）を対象項目とする。

放射性ヨウ素は、半減期が短いことから対象外とする。

ウ. 検査対象試料

水道水源から水道施設に混入する放射性セシウムを監視するため、採水場所は、浄水場の浄水及び取水地点の水道原水とする。

エ. 検査頻度

水道水による放射性物質の年間被ばく量を把握する上で必要な頻度として、原則として1ヶ月に1回以上検査を行う。

ただし、表流水及び表流水の影響を受ける地下水を利用する水道事業者等に関しては、降雨、雪解け等の高濁度時における十分な情報が収集されるまでの間は、地方公共団体、水道事業者等の検査体制に応じて、1週間に1回以上を目途に検査し、水道原水の濁度が高い時期の水道原水及び水道水の水質結果が管理目標値を十分下回っていることを確認した後に、1ヶ月1回以上の検査とする。また、放射性セシウムが大量に沈着している地域及びその下流域等放射性セシウムを吸着した土壌粒子が水道水源に到達するおそれのある水道事業者等については、必要に応じて検査頻度を高める。

十分な検出感度による水質検査によっても3ヶ月連続して水道水又は水道原水から放射性セシウムが検出されなかった場合、以降の検査は3ヶ月に1回に減ずることができる。

オ. 検査頻度及び検査地点を減ずることができる場合

水道原水の濁度が高い時期の水道原水及び水道水の水質結果が管理目標値を十分下回っていること及び浄水発生土中の放射性セシウム濃度から推計される水道原水中の放射性セシウムの放射能濃度のオーダーが管理目標値に比べて十分低いこと等が確認された水道事業者等にあつては、検査頻度及び検査地点をさらに減ずることができる。

また、流域単位で代表性のある箇所での水道原水のモニタリング体制が整っている場合には、代表性のある箇所における水道原水の水質が、その水源を利用する全ての水道事業者等の水道原水の水質とみなしても差し支えないと考えられるため、その水源を利用する水道事業者等が実施した水質検査結果を他の水道事業者等が活用することにより、検査頻度及び検査地点を減ずることができる。水道用水供給事業者から受水している水道事業者は、当該水道用水供給事業者の浄水又は水道原水の水質検査結果を活用することが可能である。

(2) 検査方法

管理目標値を超過していないことを確認するための水道水及び水道原水中の放射性セシウムの検査方法については、「水道水等の放射能測定マニュアル」によることとし、原則としてゲルマニウム半導体検出器を用いることにより、セシウム134及びセシウム137それぞれについて、検出限界値1Bq/kg (=Bq/L) を確保することを目標とする。

(3) 検査体制の確保

厚生労働省の聴き取り調査によると、ゲルマニウム半導体検出器の整備が進められてきているものの、検出限界値1Bq/kgを確保するためには測定容器を大容量のものに変更したり、測定時間を長くしたりする必要がある。管理目標値を十分下回っていることが確認できた水道事業者等から、検査頻度及び検査地点を削減することにより、必要な検査体制を確保することが適当である。